

光と風と心地よさがつながらる空間

田口知子

Session 1

吉田忠裕



建築家の思想や哲学、あるいは感性や人間性
そのすべてが完成した建築に反映されるものと
私は昔から信じておりますので……。(吉田)

吉田 本日はお忙しいなか、貴重なお時間をさいいただき、誠にありがとうございます。

田口 こちらこそお招きいただきまして、誠に光栄です。

吉田 田口先生とこうしてお話できる今日の対談を、私自身、たいへん楽しみにしております。最初に少しだけ読者に向けて説明しておく、私共YKK不動産は、自然エネルギーの可能性を徹底的に探求する『パッシブタウン』というまちづくり・すまいづくりを、富山県黒部市で進めてきました。先生にはその第4街区にあたる事業所内保育施設『たんぼ保育園』を設計していただいたわけですが、今春いよいよ開所の運びとなりましたので、このタイミングでぜひ先生の今の想いをうかがいたかったです。

田口 ありがとうございます。パッシブタウンの試みについては、私も以前から各方面でうかがっておりますので、お

これほど恵まれた黒部の自然のなか
どのような保育の空間をつくるべきなのか。
この課題がまず私のなかにありましたね。(田口)

話をいただいたときには、たいへん嬉しかったのを覚えています。お声がけも「パッシブタウンでは初となる木造建築で、しかも保育園をつくりたいんですよ」とのことでしたので、これは本当に楽しくやりがいのあるお仕事になりそうだなという予感が当初からありました。

吉田 それを聞いて安心しました。では、いい予感はあったわけですね。

田口 はい(笑)。むしろいい予感しかなかったですね。それから黒部の豊かな自然環境も、私を大いにワクワクさせてくれました。以前にもお話ししたことがあるかと思いますが、過去に私は東十条東(京都北区)の駅前にある保育園を設計したことがあるんですね。線路脇の細長く狭い土地で決して立地はよくなかったのですが、いろいろとアイデアを練っていくうちに実感したことがあるんです。それは、子どもたちの成長にとって何よりも大切なのは、いつも外の環境の変化を新鮮に感じながら、日々の体験を楽しく積み重ねていくことなのではという気づきだったんです。

吉田 素晴らしい。私も同意見ですね。

田口 東十条のときは隣地に駐車場があり、その先に北陸新幹線が見えるという環境でしたので、眺めのよいそちら側の全面に長い縁側を設けました。そこから2階・3階・4階と階段状のテラスをつくって、途中に砂場やボルダリングがで

きる斜面を設けたりして、建築基準法上の避難階段を屋外の遊び場としてデザインしました。これは、あくまで都会ならではの園庭のとれない敷地条件のなかで、外部の自然や風景を存分に感じられる遊び場をたくさんつくりたいという考えから生まれたデザインでした。一方、パッシブタウンのある黒部は、圧倒的に豊かな大自然に囲まれていますよね。いってみれば、自然の壮大な美しさも荒々しさも併せもった本場に素晴らしいランドスケープが目の前に広がっているわけですから、これほど恵まれた自然のなかのような保育の空間をつくるべきなのか……。まずその点をどう考えるかという課題が、自分のなかにありました。

吉田 どのように解決されたんですか。

田口 はい。ヒントを与えてくれたのが、園を運営されている社会福祉法人あ



「パッシブタウン」の第4街区にあたる「たんぼ保育園」の内観



建築家

田口 知子 (たぐち・ともこ) 氏

1990年東京大学工学部建築学科卒業
 1990-1998年長谷川逸子・建築計画工房に勤務
 1999年田口知子建築設計事務所(当時K&Tアーキテクト)を設立
 2001-2004年明治大学工学部建築学科 非常勤講師
 2008-2013年東京理科大学学理工学部建築学科非常勤講師
 2013-2016年 東京大学大学院新領域デザイン創成科学研究科環境学非常勤講師
 2017年-現在、明星大学総合理工学科 建築学部 非常勤講師
 2002年「TILE DESIGN CONTEST」、2005年藤森照信×伊東豊雄両氏が選ぶ住宅セレクションvol.1コンペティション優秀賞、2008年の第5回NISCインバンドデザインコンテスト審査委員賞(山本理顕氏)、2011年グッドデザイン賞、2013年日本建築学会作品選集入賞など受賞歴多数

YKK(株)／YKK AP(株) 相談役 YKK不動産(株)会長

吉田 忠裕 (よしだ・ただひろ) 氏

1947年富山県魚津市生まれ
 慶應義塾大学法学部卒業
 米国ノースウエスタン大学経営大学院(ケロッグ) 経営学修士(MBA)取得
 1972年YKK(株) (旧吉田工業(株))入社
 1980年専務取締役 1985年取締役副社長
 1990年YKK AP(株)
 (旧 YKKアーキテクチュラルプロダクツ(株)) 代表取締役社長
 1993年YKK(株) 代表取締役社長
 2011年YKK(株)／YKK AP(株) 代表取締役会長CEO
 2018年YKK(株)／YKK AP(株) 取締役
 2020年YKK(株)／YKK AP(株) 相談役
 2020年YKK不動産(株)会長
 (公財) 吉田育英会理事長



社)も拝読しましたが、実に素晴らしい内容でした。本には、先生が親として13人の里子を育てられた経験や自らの私財を注いで保育園を立ち上げるまでが書かれているのですが、先生が子どもたちに対して向ける視線がどこまでもやさしいんです。先生は尼僧でもいらっしゃいますので、厳しい修行を経て、私には想像もつかないような達観を得られているのだと思います。90歳を超えても、子どもたちと同じ目線に立ち、毎日、感謝や喜びにあふれて保育をされているお姿にも心から感動しています。

吉田 確かに先生は子どもたちの成長を大らかに受けとめながらも、とことん寄り添う教育をされていますからね。しかし本当によかった。田口先生もお会いになって共感されたということですね。

田口 共感という言葉以上かもしれない。実は、先生の考えが自分のなかに沁みこんでくるような感覚があって、それ以来、ごく自然にコンセプトやアイデアが湧き出てくるようになりましたから。「子どもたちがのびのびと過ごすことのできる融通無碍な空間」であることや、「五感を育む多様で変化に富んだ森のような空間」といった着想も、岩井先生の言葉を受ける形で生まれたものです。

吉田 やはり建築のアイデアというものは、人と言葉を交わすなかで濃密になっていく部分が大いにありますからね。

田口 はい。今回、特にそう感じました。それだけに私自身も先ほどの着想を実現するために、床のレベルに変化をつけて子どもたちの視線に動きが生まれるように工夫したり、多方向から光と風が行き交うように配慮したりと、多様な森のような空間を意識して、楽しく、それでいて心地よい保育空間となるよう最大限の努力をさせていただきました。

吉田 なるほど。個人的には、木構造の大空間がすごく心地よくて気に入っています。そのせいか保育園にいるときの私は、自然と笑顔になっていると周囲からもよく言われるんですよ。

田口 嬉しい言葉ですね。今お話にあった大空間は、地場産の杉製材を構造材の80%以上に利用しています。これは、地元の林業家や製材所の皆さんのご協力があったことで、私は今回の供給体制にも、これからの木造建築に対する大きな可能性を感じました。それからもう一つ、快適性ということでしょうか、第1街区から第3街区において取得し続けてきた室内環境やエネルギー消費量のデータを、事前のシミュレーションに活用できたことも非常に大きかったと思っています。

吉田 おっしゃる通りですね。そういう意味では第4街区はチャレンジングな試みが多く話がありますね。まだまだうかがいたいことがありますので、引き続きお話をさせていただきます。(つづく)

いじ福祉会理事長の岩井恵澄先生でした。ヒアリングで岩井先生とお会いしたときに、「小さな子どもたちは外の景色を見て、光や風を感じることで、心にポエムを育てるんです」というお話があったので、心が揺さぶられるような感動があったのを今も鮮明に覚えています。その瞬間に、私のすべきことは「建築を通じて、岩井先生の言葉をカタチにすることなのは」と考えるようになりました。

田口 今、ふり返って考えてみると、最初は吉田さんにお会いして構想やアイデアをお伝えする場をいただいております。たよね。そのなかであるとき、「わかりました。次はある方にぜひ会っていただきたいんです」というお話があったと記憶しています。あのときの「ある方」は岩井先生のことだと思っております。「わかりました」という言葉には、どういった意味があったのでしょうか。せっかくなので、ぜひお聞きしたいなと(笑)。

吉田 あのときの「わかりました」は、建築家としての田口先生については、全部ではないにしても「いい意味で理解しました」というニュアンスだと考えてください。昔から私は、建築家の思想や哲学、あるいは

は感性や人間性といったものすべてが、必ずその人の建築作品には反映されるものと信じているところがありません……。ということもあって、まずは田口先生とじっくり会話をし、建築家としての想いや考えをうかがいたかったんです。

田口 そういうことでしたか。

吉田 はい。お話をするうちに、先生が社会に向けるやさしい目線や熱烈な探究心が実に素晴らしいなと。同時に、とても物腰やわらかに話す方だけれど、実は、何かを成し遂げるためには闘う強い意志も持っている建築家なんだと感じましたので、もうこの段階でぜひお願いできればと個人的には考えていました。

田口 ありがとうございます。

吉田 とはいえ、何よりも重要なのは、やはり教育の現場にいらつしやる岩井先生の言葉にふれて、きちんと共感していただくことでした。同時に二人が会うことで、田口先生が新しいインスピレーションを得られるのではと期待していた部分もあったんです。

田口 そうでしたか。では結果的には、すべてが吉田さんのお考え通りに進んできたというわけですね。

吉田 ありがとうございます。

田口 というのも、岩井先生のお話を聞いて私自身がすっかり魅了されてしまいましたので……。先生の著作である『生き行く道―尼さんママの40年』(主婦の友

光と風と心地よさがつながらる空間

田口知子

Session 2

吉田忠裕



保育施設を木造とした理由は、あたたかみのある空間で自由な感性を子どもたちに育んでもらいたいという希望があったからです。(吉田)

吉田 今回の対談には、建築家の田口知子先生をお招きし、建築への思いや発想法についていろいろとかがつてきました。

田口 先生には、私共YKK不動産が富山県黒部市で展開するパッシブタウンでお仕事を一緒にさせていただきました。第4街区にあたる事業所内保育施設「たんぼぼ保育園」を先生に設計していただいたんですね。ここまでのお話で私が特に嬉しかったのは、園を運営されている社会福祉法人あいじ福祉会理事長の岩井恵澄先生の言葉から大きなインスピレーションを受けて設計をされたというお話でした。

田口 私の方こそ岩井先生にお会いする機会をつくっていただき、本当にありがとうございました。どこまでも子どもたちに寄り添って活動される先生の姿勢にたいへんな感銘を受けました。なかでも「小さな子どもたちは外の景色を見て、光や風を感じることで、心にポエムを育

てるんです」という言葉にはすっかり心酔してしまいました。

吉田 コンセプトに掲げた「子どもたちがのびのびと過ごすことのできる融通無碍な空間」であることや、『五感を育む多様に変化に富んだ森のような空間』といった考えも、岩井先生との言葉を交わすなかで着想されたとのことでした。

田口 はい。岩井先生の言葉にふれてから、コンセプトやイメージが自分のなかから自然と湧き上がってくるような不思議な感覚があったんです。そういう意味でも、とても得難い経験をさせていただきました。

吉田 それはよかったです。

田口 ところで、私の方からも一つ、吉田さんにかがいたことがあるんです。

吉田 ええ。何でも訊いてください。

田口 それは、いつの段階から「保育施設を木造でつくりたい」というアイデアを持っていたのか……ということなんです。

す。私自身はオフィーアいただいたときにまさにやりたいお仕事でしたので嬉しくてしかたなかったのですが、考えてみると、第4街区はパッシブタウン初の木造建築ですよ。このタイミングで木造とすることに、吉田さんのなかでどのような考えがあったのか。ぜひうかがいたいなと思いをまして。

吉田 なるほど。実のところ、かなり早い段階から構想としては持っていました。まず大きな前提として、『豊かなまち』というものを私なりにイメージしたときに、何といっても「そこには子どもたちの健やかな成長を大らかに受けとめる空間であり施設があるべきだろう」という想いがあったんですね。

田口 では、まちのあり方をイメージするところから始められて……。

吉田 ええ。日常の風景のなかに子どもたちが健やかに成長できる空間があることで、まちは豊かになりますし、子どもに寄り添う空間について考えることは、未来を考えることにもつながりますよね。そういったなかで、幼児期の感性を育てる保育施設の重要性が、私のなかでどんどん大きくなっていきました。新たな条件に『木造建築であること』を加えたのは、あたたかみのある自然素材に囲まれた空間で、ぜひ自由な感性を子どもたちに育んでもらいたいという希望があったからです。

立山連峰が美しい黒部のランドスケープに 呼応する建築とするため、庇が長く張り出した 切妻の大屋根を採用することにしました。(田口)





建築家

田口 知子 (たぐち・ともこ) 氏

1990年東京大学工学部建築学科卒業
 1990-1998年長谷川逸子・建築計画工房に勤務
 1999年田口知子建築設計事務所(当時K&Tアーキテツク)を設立
 2001-2004年明治大学理工学部建築学科 非常勤講師
 2008-2013年東京理科大学理工学部建築学科 非常勤講師
 2013-2016年東京大学大学院新領域デザイン創成科学研究科 環境学 非常勤講師
 2017年-現在、明星大学総合理工学建築学部 非常勤講師
 2002年「TILE DESIGN CONTEST」、2005年藤森照信×伊東豊雄両氏が選ぶ住宅セレクションvol.1コンペティション優秀賞、2008年の第5回NISCインバンドデザインコンテスト審査委員賞(山本理顕氏)、2011年グッドデザイン賞、2013年日本建築学会作品選集入賞など受賞歴多数

YKK(株)／YKK AP(株) 相談役 YKK不動産(株) 会長

吉田 忠裕 (よしだ・ただひろ) 氏

1947年富山県魚津市生まれ
 慶應義塾大学法学部卒業
 米国ノースウエスタン大学経営大学院(ケロッグ) 経営学修士(MBA)取得
 1972年YKK(株) (旧吉田工業(株))入社
 1980年専務取締役 1985年取締役副社長
 1990年YKK AP(株) (旧 YKKアーキテクチュラルプロダクツ(株)) 代表取締役社長
 1993年YKK(株) 代表取締役社長
 2011年YKK(株)／YKK AP(株) 代表取締役会長CEO
 2018年YKK(株)／YKK AP(株) 取締役
 2020年YKK(株)／YKK AP(株) 相談役
 2020年YKK不動産(株) 会長
 (公財) 吉田育英会理事長

田口 素晴らしいお考えですね。一方、現在、計画が進む第5期街区は、木造の集合住宅を予定されているとうかがっています。ということは、やはり第4街区を新しいフェーズとすることを、吉田さんは当初から想定されていたということでしょうか。

吉田 ええ。そういう位置づけで考えていました。また、木造建築とすることに加えて、第1街区から第3街区においてずっと記録し続けてきた室内環境やエネルギー消費量のデータを、積極的に活用するのもやはり第4街区からだろうと。先生にも事前にシミュレーションした上で設計に入っていたように、言ってみれば今まで蓄積してきた知見の応用編が、この第4街区からいよいよ始まったということですね。

田口 ありがとうございます。よくわかりました。以前から思っておりましたが、やはり吉田さんご自身が木という素材が相当お好きなんですね。

吉田 大好きですね。しかも昨今は、加工技術などの進化もあり、海外でも木材の利用が広がっています。そういった意味合いからも、業界の重要な潮流の一つとして個人的にずっと注目してきました。何より木は、あたたかみのある質感がいいですね。それに加えて、素材として考えたときには断熱性能が高いことも大きな魅力となっております。

田口 おっしゃる通りだと思います。それから、カーボンニュートラルへのアプローチとしても木材は非常に有効ですね。木は内部に二酸化炭素を固定化してくれますから。

吉田 ええ。私共がパッシブタウンで目指してきたのは、「住宅性能を徹底的に高めることによって、住まいの快適性と自然エネルギーの利用の可能性を探求すること」であり、それによって「持続可能な社会に貢献すること」ですので、ここで木造建築とすることには大きな意義があると思っています。加えてもう一つ、「木造建築のココが興味深いな」と強く思う点がある、自分のなかにはありませんか。

田口 どういった点でしょうか。

吉田 それは伝統的なものからモダンなスタイルまで、思いのほか幅広い建築に対応できるということなんですよ。新しい感性を受け入れる余地も十分にありながら、たとえば古来からの工法のよさも活かすこともできる。そういう受け皿としての大きさが、木という素材にあるように思うんです。それだけに今回、どんな構想のもとに先生がご提案されるのかを、とても楽しみにしていました。

田口 勉強になります。建築への造詣が深い吉田さんならではのお考えですね。

吉田 たいへん恐縮です(笑)。設計するにあたって、先生は「ランドスケープと呼応する建築」という言葉を使われてい

らっしゃいます。この考え方が全体の意匠のお話にも深く関わってくるように思いますので、少しご説明いただけますか。

田口 了解しました。最初に黒部を視察したときに、私は自然環境の素晴らしさに感動してしまっただけですよ。雄大で美しく、それでいて荒々しさも感じさせてくれて……。

吉田 確かに自然環境の豊かさは黒部の特筆する点でもありますからね。

田口 はい。それで夢中で思索し始めるのですが、するといろんなことに気づくんですよ。たとえば、黒部扇状地はゆるやかな勾配を持っていて、第1街区や第2街区の向こう側から西に向かつてゆっくり下がっているんだとか。一方で、南側に連なる立山連峰の圧倒的な美しさの山景も、黒部の風景のなかにいる限り、いつも心のどこかで意識することになりますよね。私としては、こうした美しく大きなランドスケープを地球の一部のような形でとらえて、建築のなかで表現することはできないかという想いを強く持つようになっていきました。

吉田 素晴らしい。そうやって思索を積み重ねていかれていたと……。

田口 ええ(笑)。そして、そういった考

吉田 よくわかりました。

田口 それで、黒部のランドスケープと呼応するということを考えたときに、私なかでは美しい山並みのリズムと調和するようなイメージで、庇が長く張り出した切妻の大屋根とすることがベストだと考えました。

吉田 モダンイズム建築の観点からいうと、切妻には難しさもあると思うのですが、ポリウムや勾配をコントロールすることで、とても美しい現代的なフォルムにしていたんだと思っています。

田口 ありがとうございます。まさにそこを目指していたので、たいへん嬉しいです。切妻を採用した理由には、合理性の問題もあるんですよ。日差しをカットする意味でも庇があつた方がいいし、庇があることで人が歩く空間も生まれま

す。さらに建築物そのものを劣化から防ぐ効果も見込めますよね。また「たんぼ保育園」の場合は、庇をぐつと伸ばしているの、外から見たときにはやや低く見えるはずですが、視覚的なポリウム感を減らすことで、周囲に対して慎ましさや謙虚なイメージを与えることができればという想いもありました。

吉田 素晴らしい。ランドスケープと呼応するという考え方は、その建築が地域と共にあることを表明する意味もあるように思うのです。引き続き先生の想いをうかがわせてください。(つづく)

光と風と心地よさがつながる空間

田口知子 Session 3 吉田忠裕



思考に思考を重ねて闘い抜く『強さ』に加えて 社会に想いをめぐらせる『やさしさ』を 持った建築家が私は好きなんです。(吉田)

吉田 今回は建築家の田口知子先生をゲストにお招きして、いろいろと意見を交わしてきました。おかげさまで、建築を中心とする有意義なお話を数多く聞くことができて、たいへん楽しく勉強させていただいております。

田口 いえいえ(笑)。私の方こそとても勉強になっております。以前から存じ上げてはいましたが、吉田さんは建築分野の造詣が驚くほど深く……。本日は貴重な機会をいただきましたので、吉田さんにうかがったことから今後の発想のヒントを見つければと考えています。

吉田 過分なお言葉をいただき恐縮です(笑)。先生にはパッシブタウンの第4街区にあたるYKKの事業所内保育施設『たんぼぼ保育園』を設計していただいたわけですが、こうして理解を深めるなかで、あらためて先生にお願ひしてよかったなど。パッシブタウンは、私共が富山県黒部市で展開するまちづくり・住まいづくりで

黒部の風景とのつながりを持った森のような空間を子どもたちのために
つくりたいと強く心に思いました。(田口)

す。ここまでお話ししたように、私は第4街区を取り組み全体における一つのターニングポイントに位置づけ、かなり早い段階から「木造建築で保育施設をつくる試みに挑戦しよう」と考えていました。

田口 発想の原点は、吉田さんご自身が『豊かなまち』のあり方をイメージしたところからだというお話でしたよね。

吉田 そうですね。豊かなまちには、やはり「子どもたちの健やかな成長を大らかに受けとめる空間が必要だろう」という想いがありました。何より子育ての空間について考えることは、まちの未来を考えることにもつながりますから。それだけに、先生から『子どもたちがのびのびと過ごすことのできる融通無碍な空間』であることや、『五感を育む多様に変化に富んだ森のような空間』といったコンセプトをご提案いただいたときは、うれしかったんです。あえて口にはしませんが、内心「これはきつと素敵な保育の空間がで

きるに違いない」と考えていました。

田口 そうでしたか。私自身はまだその段階ではハラハラドキドキで、「ここからが、たいへんだぞ」と覚悟を決めていました(笑)。

吉田 よくわかります。素晴らしい建築をつくる方は、格闘しながら思考を重ねていくプロセスを、非常に大切にされますからね。今回の計画の過程で、「田口先生はとてもやさしいお人柄の方ですが、実はとことん真っ直ぐにぶつかっていく闘士みたいな建築家ですよ」と聞いたことがありますね。私はそのときに迷うことなく、「もちろん、わかっています。そういう方だと考えたからこそオフアールたわけだし、その分、期待もしているんだよね」と即答したんですか。ま

田口 そんなことがあったんですか。ま



『パッシブタウン』の第4街区にあたる『たんぼぼ保育園』の内観

いりました(笑)。皆さん、けっこうしっかり見られているんですね。

吉田 はい。もちろん、最高のほめ言葉ととらえてください。それに私も経験上、思考に思考を重ねて闘い抜ける強さを持った建築家が昔から好きなんです。加えてもう一つ、建築家に私が求めるのは社会や人の暮らしに想像力をめぐらせる、やさしさでしょうか。私は作家のレイモンド・チャンドラーが遺した「強くなければ生きていけない。やさしくなければ生きていく資格がない」という名言が好きなのですが、考えてみると建築家の方のタイプを見ると、この言葉を一つの指針としているようなところがあるかもしれません。

田口 では、そういった指針のなかで、私もお声がけいただいたということによ





建築家

田口 知子 (たぐち・ともこ) 氏

1990年東京大学工学部建築学科卒業
 1990-1998年長谷川逸子・建築計画工房に勤務
 1999年田口知子建築設計事務所(当時K&Tアーキテクト)を設立
 2001-2004年明治大学理工学部建築学科 非常勤講師
 2008-2013年東京理科大学理工学部建築学科 非常勤講師
 2013-2016年東京大学大学院新領域デザイン創成科学研究科環境学 非常勤講師
 2017年-現在、明星大学総合理工学部建築学部 非常勤講師
 2002年「TILE DESIGN CONTEST」、2005年 藤森照信×伊東豊雄両氏が選ぶ住宅セレクションvol.1コンペティション優秀賞、2008年の第5回NISCイソバンドデザインコンテスト審査委員賞(山本理顕氏)、2011年グッドデザイン賞、2013年日本建築学会作品選集入賞など受賞歴多数

と想っています。
吉田 なるほど。興味深いですね。
田口 これは、私の個人的な想いなのですが、日本の建材に用いられる木系素材は、美しすぎると感じる場合があります。しかも傷も節もタメな上に、メンテナンスフリーであることを求められるので、結果として薄いシートで木目を表現するような使い方が多くなってしまっています。
吉田 よくわかります。
田口 自然な木は、節もあれば割れも発生しますし、時間と共に色も退色してきます。富山のように雪の多い地域の木は、年輪が緻密になるので特に個性が出やすくなります。けれど、育つ地域によって異なる性質があるがままの姿で利用する方が素敵だなんて私は感じるし、きっと子どもたちにもよい影響を与えるはず。「たん



ぽぼ保育園」では、ありのままの木材の使い方を通じて、多様性への志向を建築のなかに埋め込めればと考えました。
吉田 素晴らしい。子どもたちの多様な成長を受け止める空間をつくる……という意味においても、とても価値のある考え方だと思えます。
田口 ありがとうございます。今回、御社の皆様のご尽力で、地元の技術力の高い工務店や林業家とつながり、地域産材の杉で建築をつくることができましたし、途中のプロセスにおいても関係者やパッシブハウスの住民の皆さんと魚津の山中に入って保育園で使った本数以上の杉苗を植林することもできました。地域の林業家や森林組合の皆さんと出会って学んだことは、私にとって何にも替え難い貴重な経験となっています。

吉田 確かに地域経済を視野に入れた第4街区の試みは、パッシブタウン全体にも大きな価値を与えたように思います。
田口 地域資源を有効利用することは、地域生産者の支援になり、ひいては山の保全にもつながる可能性がありますので、とても大切な活動だと思います。また、建築を通して出会った地域について学び、その土地に根差した資源と真摯に向き合っ、適材適所で利用できるようにすることも、設計者としての自分の目標になりました。今回のパッシブタウンの試みは、私に新たな可能性を与えてくれたように思います。
吉田 私共も第4街区の取り組みを通じて新たな可能性を開くことができましたと考えています。本日は有意義なご提言をありがとうございました。(了)

YKK(株)／YKK AP(株) 相談役 YKK不動産(株)会長

吉田 忠裕 (よしだ・ただひろ) 氏

1947年富山県魚津市生まれ
 慶應義塾大学法学部卒業
 米国ノースウエスタン大学経営大学院(ケロッグ) 経営学修士(MBA)取得
 1972年YKK(株) (旧吉田工業(株))入社
 1980年専務取締役 1985年取締役副社長
 1990年YKK AP(株)
 (旧 YKKアーキテクチュラルプロダクツ(株)) 代表取締役社長
 1993年YKK(株) 代表取締役社長
 2011年YKK(株)／YKK AP(株) 代表取締役会長CEO
 2018年YKK(株)／YKK AP(株) 取締役
 2020年YKK(株)／YKK AP(株) 相談役
 2020年YKK不動産(株)会長
 (公財) 吉田育英会理事長



ろしいでしょうか(笑)。
吉田 もちろんです。最初に先生の強さの話ばかりしてしまいました(笑)、やさしさについては、竣工した「たんぽぽ保育園」へ最初に足を踏み入れた瞬間にとっても強く感じました。これほど木材のあたたかみや美しさを活かされた、豊かな保育の空間もないだろうなと。とりわけ木構造の大空間は素晴らしい。何より先生が日々暗闘された結果として、子どもたちに、あのような「あたたかな空間で成長してほしい」という想いを持たれたということがです。私は、そのこと自体がとても素晴らしいと感じました。
田口 ありがとうございます。
吉田 ところで室内のディテールを見ていくと、実に巧みに木材を使い分けているのがわかります。長年の研究の成果だ

と思うのですが、木という素材に対して、独自のお考えや想いなどがあるようでしたら、ぜひ聞かせていただけますか。
田口 わかりました。木は昔から人が住む空間で使われてきましたが、音や湿気を吸収したり、衝撃を受けとめてくれるので、空気の質がやわらかくなるんですよ。さらに木は、構造体にも仕上げ材にも使える万能な材料ですし、カーボンニュートラルにも貢献することができます。「たんぽぽ保育園」では、構造体としての木材を内部にあらわすことで、ふわっと木に包まれる空間をつくっています。また、床には足さわりやすい杉の無垢圧縮材を使っていますし、天井にはヒノキ繊維を圧縮した材を使用し吸音効果を持たせています。一方、縁側に用いたのはヴェルダデッキという木材。こちらは無

垢のパイン材でササクレが起きにくく、日光で熱くなりにくいので、裸足で縁側に出ることもできます。木の材料はいろいろなので、場所に適した厳選した素材を使うように心がけました。
吉田 特に配慮されたのは、どのような点でしょうか。
田口 そうですね。黒部の風景との連続性を考え、この地域で育った杉材を建築全体に活用し、内部空間にもあらわしたことででしょうか。立山の杉は、黒みや根曲りが出る場合もあり、使いどころが難しいと言っ方もいらっしやいます。しかし「たんぽぽ保育園」では、この黒部の杉の個性を積極的に活かして、子どもたちにも感じてもらうと考えました。家具にも節のある集成材を使っていますが、そのおかげで味わい深い仕上がりになった

